

第1回奈良県耕畜連携モデル推進会議 概要

1 日 時：令和5年2月8日（水）10：00～12：00

2 場 所：奈良県農業研究開発センター 交流・サロン棟2階

3 出席者：別紙のとおり

4 概 要：

○「奈良県耕畜連携モデル推進会議設置要領（資料1）」が承認された。

○座長として大阪経済大学藤本教授が選任された。

○県から資料説明を行い、「令和5年度までに予定する耕畜連携関連事業の概要（資料4）」の事業計画について承認された。

○意見交換

出席者からの主な意見は以下のとおり。

① 畜産農家からの主な発言

- ・ 耕畜連携の議論と並行して、県産の稲WCSを利用することで奈良県の畜産物がより高く売れることに繋がるような付加価値の付け方についても考えていけば、耕畜連携の循環がより推進されるのではないかと。
- ・ WCSを使い始めたとき、日量20トンあった乳量が14トン未満まで落ちた経緯がある。近年はWCSの品質が良くなっているが、過去の経験から現在は乾乳前期のみ給与している。本日の県からの説明では全ステージで給与可能ということだったので、搾乳時期でも上手く使えるよう検討したい。
- ・ 当初に比べ、最近のWCSの品質はすごく良いと感じているため、引き続き高品質なWCSの生産をお願いしたい。
- ・ 酪農家にとっては、どちらかといえばWCSよりもデントコーンサイレージの方が魅力を感じている。
- ・ 肥育農家としては粗飼料より濃厚飼料の方が給与量は多いので、県内で麦やとうもろこしといった輸入濃厚飼料の代替となる作物の栽培も検討いただきたい。
- ・ 県としてWCSを推進するのであれば、国の補助金に加え、県からの独自補助を検討してはどうか。

② 集落営農組織からの主な発言

- ・ 資料6ではWCSのロール数が10a当たり8ロールに設定されているが、実際の収量はもっと少ない。一方で、WCSの作業委託費は面積当たりであることから、ロール販売収入のみで委託料を相殺できないため、（国の水田活用直接支払交付金を除けば）耕種農家の持ち出しが発生する。耕種農家としては、WCSの利益が増えるのであれば、作付面積を増やす意向はある。現状としては、WCSのメリットは、収入面ではなく、繁忙期に収穫作業を委託できるところに感じている。

③ コントラクターからの主な発言

- ・ 直近2年のWCS作付面積は43ha前後。平均すると年間で2,700~2,800ロール収穫できている。今年度、主食用米品種でWCSを作付したのは1農家で、面積としては約60a弱。その他は専用品種である「ホシアオバ」と「たちすずか」の2品種が作付されている。
- ・ WCSを利用する畜産農家が減ってきているという点と、現在の人員で適期収穫できる面積が40haくらいという点から、作付面積は現状維持で進めたいと考えている。
- ・ 実際のWCSの収穫量は、目標8ロールに対し県下平均で約6.3ロール。収量が低い要因として、地面がぬかるんでいる圃場における高刈りによるロスや、中山間地域での獣害の影響もある。どのような圃場でも作業にかかる人件費や燃料費等のコストはあまり変わらないので、作業費は面積計算でいただいている。
- ・ 小型WCSの収穫・調整にはモアやレーキを使うとのことであるが、県内の水田は面積が小さい圃場も多く、そういった圃場での作業は難しいと思う。
- ・ 堆肥循環は良い取組であると思うが、圃場が乾きにくくなるので、過剰施肥には注意が必要である。
- ・ WCSの収穫時期に圃場の水が抜けていないと作業性が大幅に悪くなるので、早い時期からきちんと落水するようお願いする。

④ 学識経験者からの主な発言

- ・ 人口減少や高齢化により1人当たりの米の消費量が減ると、過剰作付により米の値段が暴落する、あるいは耕作放棄が増えることが考えられる。食用米から飼料用米を含めた他の作物へ作付転換を推進していくことは、米の需給バランスの均衡を図る面でも非常に重要。
- ・ 世界における日本の経済的な相対的地位は下がっており、今の円安基調はこのまま続くことが予想される。また、地球の人口は増加する一方で耕地面積は一定のため、輸入飼料の値段はおそらく上がっていくと考えている。
- ・ 全国的に畜産農家一戸当たりの飼養頭数が増えており、家畜ふん尿処理や粗飼料の生産は、コントラクターという外部組織に委託するという流れになっている。
- ・ 現在の稲WCSの価格であれば、TDN当たりの単価で計算すると輸入乾草よりもはるかに安い。資料6の稲WCSロール販売価格は、稲WCSの収穫・調整・運搬のコストとほぼ一致しており、耕畜連携助成の13,000円は堆肥散布のコストに相当する。全国的には、コントラクターがWCSの収穫調整から圃場への堆肥散布まで行うことで採算をとっている。耕種農家としても稲WCS栽培にはメリットがあり、収穫以降の作業を外部委託した場合の比較では、稲WCSは食用米と同等あるいはそれ以上の収入が期待できる。
- ・ 耕種農家と畜産農家の間に入るコントラクターをいかに上手く育成するかが重要である。耕種農家へのWCS補助金は当初5万円であったものが、現在は8万円となっており、個人的には、8万円という単価であれば、食用米より収入は上がると思う。

<今後の予定>

第2回推進会議を令和5年10月頃開催予定であり、第1回会議資料を更新するとともに、実証事業の結果報告を示して、更なる議論を行う予定。 (以上)